

池田大作SGI会長は、インドを訪れた際、仏陀の悟達の地に立ちました。会長は、全身がふるえるような感動を覚えました。太陽そのものが、その場所から昇って、大地を暖めてくれているかのようにでした。自分ほまさに、この場所に、このブツダガヤに、仏陀の足跡が刻まれたこの地に立っている——池田会長がそのとき抱いた最初のアイデアは、この地から始まった

仏陀の大地から世界へと発展

ヴォロビヨヴァーデシヤトフスカヤ

アの専門家たちの間でも。その頃、ロシアでは、この分野の研究者は、決して多いとはいえませんでした。しかし、より多くの若手の研究者たちがすでに大学を卒業しており、彼らは仏教学の偉大な先人たち——オットー・ローゼンベルグ、フョードル・シチエルバツコイ、セルゲイ・オルデンブルグのような——が歩んだ道に続くとしていました。それらの若い学者は、

日本語、欧州

語、ロシア語

の専門家との

仕事を続ける

この新しい研

偉大なる教えの研究に献身する特別の研究所が必要だということでした。これが東洋哲学研究所の始まりでした。1961年のことでした。

このアイデアは、日本の学者方に支持されて、研究所が実現しました。まもなく、研究所の機関誌『東洋学術研究』は、仏教哲学の分野で働くヨーロッパの学者の間で名声を得るようになりました。やがて、ロシ

究施設を歓迎いたしました。彼らはそこに、彼らが必要とする支援を見出したのです。それが東洋哲学研究所でした。研究所は、彼らに論文の発表の場を提供してくれました。ロシアの今の研究チームのリーダーの中から主な名前を挙げれば、V・I・ルドイ、E・P・オストロフスカヤ、T・V・エルマコワなどの論文です。池田大作博士は、仏陀の教えを明らかにするために

多くの書物を著してられました、しかし博士は、それだけにとどまることなく、仏教哲学をさらに発展させることに全力を尽くしてられました。同時に、創価学会インタナショナルを、研究者が集うだけではなく、智慧を求め、仏の教えこそがすべての害悪から解放してくれると考える一般の人々が頼ってこられる組織へと造り上げてこられたのです。現在、創価学会は世界的な仏教信徒組織であり、その研究のセンターが東洋哲学研究所なのです。

研究所の活動の焦点のひとつは、その初期の頃から、「法華経」の研究でした。法華経は、仏陀が弟子たちに説き遺したもののうち最重要のひとつです。サンスクリット語、日本語、中国語、チベット語——法華経には多様なバージョンがあります。池田博士の指導のもと、東洋哲学研究所は、法華経の多くの写本を公開してきました。

※写真版やローマ字版として、これまでに13冊を刊行。出版元の創価学会から研究・編集を委託された。

ロシアの写本は言うまでもありません。それらは、

東洋哲学研究所と長い友好の歴史をもつサンクトペテルブルクの東洋古文書研究所（旧・ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部）に長い間、保管されてきたものです。そして、東洋古文書研究所は、その所蔵品のなかから法華経を中心に、日本で写本の展示会を開催いたしました（1998年、東京での「法華経とシルクロード」展）。その応答として、ロシアでは池田博士が撮影した素晴らしい写真の展覧会が行われました。

※池田SGI会長撮影の「自然との対話」写真展は、2000年、サンクトペテルブルクで開催された（主催はロシア文化省、ロシア民族博物館など）。会長の写真展はロシア連邦では、モスクワ、ヤクーツク（サハ共和国）でも開催されている。

東洋哲学研究所の50周年は、仏教哲学の分野で働くすべての人々によって祝福されています。われわれは、この非常に高名な組織と連携していることを、幸せに思い、そして誇りに思っております。

(M.I. Vorobyeva-Desyatovskaya / ロシア科学アカデミー

東洋古文書研究所・南アジア部長)